

瀬戸旭医報

平成26年1月1日

発行所 瀬戸市西長根町10番地 瀬戸旭医師会 Tel.84-1155 発行人 野田正治

URL <http://www.setoasahi.com> E-mail isikai@setoasahi.com

一隅を照らす

独立行政法人 労働者健康福祉機構 旭労災病院 病院長 木村玄次郎

一昨年10月に旭労災病院に着任し、既に2年目を迎えています。瀬戸旭医師会の先生方の御支援のお陰で、いよいよ今年から旭労災病院は全面建て替え工事に着手致します。

私は、昭和23年和歌山県田辺市の生まれで、小学生時代、近所に後に映画化された「黒部の太陽」の主人公（石原裕次郎が演じた）が住んでいました。巨大な黒四ダムを建設する前に試験的に世界で初めてのアーチ式ダムを田辺市郊外に建設するためであった。その子供さんと私が友達であったことから、何となく土木や建築に興味を持ち育った。私の兄は京都大学工学部に進学し、私も当然、工学部へと考えていた。高校2年のとき病弱の母から医学部に進学して欲しいとせがまれ、昭和42年大阪大学に入学した。臨床講義に接する頃から、心臓病に興味を持ち、将来は循環器内科に進もうと自分なりに考えていた。ところが、最初に配属されたポリクリが腎臓内科であった。そこで腎臓内科主任の浦壁講師（第一内科）から腎臓内科に入るよう強引に勧誘され、先生の魅力に引きつけられ腎臓内科を専攻せざるを得なくなった。このように、医師になるのも腎臓内科を専攻することになったのも私の本心ではなかった。

大学卒業2年後、第一内科の阿部教授が日本腎臓学会総会を開催した際、招請講演された Olroff 博士（米国 NIH）の京都案内を命じられ、浦壁講師の推薦で卒業4年目から NIH に留学することが決まった。渡米直前、浦壁講師が突然死され、私は途方に暮れたが、予定通り出発した。留学生活は楽しく充実していた。私の仕事振りから入れ替わりに2人が日本からの留学生として採用された。しかし、基礎研究よりは臨床に従事したいと考えていた。丁度その頃、千里に国立循環器病センターが開設され腎臓内科医を募集しているとの連絡が大学よりあり2年間の留学を終え帰国した。循環器合併症を有する患者さんの透析治療が最大の仕事であった。当時、透析療法は始まったばかりで、確固とした治療スタンダードがなく、手探り状態であった。このままでは進歩がないと考え透析療法を勉強したいと留学を申し込んだ。丁度、至適透析に関する共同研究の中心的役割を果たしていたミネソタ大学（Hennepin County Medical Center）に留学できた。これが、私の人生の中で自分が主体的に方向を決定した唯一の決断である。今から振り返っても、あの時アメリカの知識を導入できたのは正解であったと信じている。学んだことは、「透析療法の基本」として出版し、我が国の透析療法の発展に寄与できたと思う。この教科書は10刷と改訂を重ね、今でも透析療法従事者のバイブルになっている。

国立循環器病センター腎臓内科のもう1つの使命は「高血圧と腎や食塩との密接な関係」を明らかにし、高血圧や腎不全への対策を打ち出すことであった。我々は食塩感受性が高いと心血管事故が高まる事実を世界で初めて報告した（Lancet 1997年）。食塩と高血圧の関係からヒトでも腎糸球体血圧を推測できる方法を発表したところ、Harvard 大学（Brigham and Women's Hospital）の Brenner

教授から招請され44才のとき3回目のアメリカ留学をした。この成果は、Laragh& Brenner の世界的な教科書に分担執筆している。

平成11年、名市大教授に就任し、その後は、医師会の先生方とも御一緒する機会が多かったと思う。実は、名市大へは私が最初に apply した訳ではなく、同級生で名門育ちの循環器専門医が立候補していた。しかし、選考が成立せず、彼が再立候補を断念したため、ピンチヒッターとして私にお鉢が回ってきただけである。名市大では、腎不全の発症に地域差があることを腎不全マップとして JAMA (2000年) に発表し、その後、ACE 阻害薬の消費量と腎不全発症率は逆相関することを明らかにし国際的にも注目された。Lancet と JAMA という臨床分野で最高峰の医学誌に論文を掲載できたことは幸運であるが、NIH 時代を除いて臨床に徹してきた賜物と誇りに思う。日本の医学界を見ても内科学の教室で本当の意味で臨床と取り組み、臨床分野で大きな成果を挙げている教授は極めて少ない。

1年半の任期を残し、旭労災病院に移動するよう大学側から意向を示されたときには驚かされた。最初は、堅く固辞していたが何度も説得を受け、これまでの経験から、これも自分の人生かと考え、お引き受けすることにした。一昨年9月、名古屋では初めての日本高血圧学会総会(第35回大会)を主宰したのを機に、10月より、旭労災病院に着任した。このように、私は自分で自分の方向性を決定したことは殆ど無く、与えられた仕事を着実にこなす発展させるべく最善の努力をして来ただけである。私の最大の能力は、どこにいても、たとえ自分の関心事とは多少異なっても、それなりに、そこで貢献できたことではないかと思う。自分の領域を固守することなく、また他の領域を侵すことなく、与えられた範囲内で全力を尽くすことも一つの生き方ではないかと思う。自分に与えられた仕事を輝かせることが私の責務と思う。これが私にとっての「一隅を照らす」と理解している。旭労災病院では、地域医療に貢献することが最大の努めと心得ている。先生方と共に地域に貢献できることは何かを真摯に議論し、この地域の発展に尽くしたい。